

CONTENTS

- | | |
|----------------|--|
| 特集 | 1 科学研究費補助金(特定領域研究)
「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」領域全体研究会(6月19日~20日) |
| 研究・教育活動 | 2 就任にあたって(国立情報学研究所 副所長 坂内 正夫)/大学院教育について
NII定例研究会 / 第18回<5月15日>
Comparative Genomicsの手法による、DNA配列データからの生物情報の抽出(国立情報学研究所 藤山 秋佐夫)
情報通信ネットワークの高機能化、高信頼化に向けた取り組み(国立情報学研究所 藤野 貴之)
NII定例研究会 / 第19回<6月26日>
制約に基づくエージェントを用いた探索手法(パリ第6大学 Philippe Codognet)
テキスト・エンコーディング・イニシアティブ(TEI)とGENIAコーパス(Jozef Stefan研究所 Tomaz Erjavec)
数値解析と応用数学に関するセミナーの開催 / コミュニティ形成型遠隔教育プロジェクト「e-教室」
/ 学術研究セミナー(第1回)を開催 学術研究フォーラム |
| 事業活動 | 7 米国RLGとの目録システム間リンクの運用開始 / メタデータ・データベース構築システムの試行
運用開始 / 学術情報ネットワーク(SINET)のIPv6サービス開始について |
| トピックス | 8 平成14年度国立情報学研究所オープンハウス(一般公開)を開催 / 平成14年度軽井沢土曜懇話
会(6月29日・7月13日)
HOT NEWS 平成13年度学術情報データベース実態調査報告書の刊行 |
| NII掲示板
お知らせ | 10 人事異動 / 国立情報学研究所の教官公募について
11 今後の研究会・シンポジウム・行事等の予定 |

科学研究費補助金(特定領域研究)

「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」 領域全体研究会(6月19日~20日)

文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)の研究領域のひとつとして、平成13年度より5年間の計画で、「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」(領域代表者:慶應義塾大学 安西祐一郎教授)が発足しています。国立情報学研究所は、情報学分野の大学共同利用機関として、発足当初から様々な形で、このプロジェクトの推進に協力してきました。

このプロジェクトの目的は、情報技術(IT, Information Technology)の社会的動向を見据えつつ、ITの深化の基盤を拓いていくための情報学研究を実践することにあります。情報学研究は学問分野を横断した広がりを持つものであるため、現在の社会的要請を十分に意識した問題設定を行い、分野横断的な共同研究を進めようとしています。これにより、ITという現実的な効用に結実させるということで具体的な成果を示しつつ、一方、情報学の発展の歩みを確実なものにすること、すなわち情報に関する基盤的な学術成果をあげることを狙っています。この研究領域では、大きく次の6つのテーマに分かれて研究を進めています。



研究会の様子

1: 新しいソフトウェアの実現

2: コンテンツの生産・活用に関する研究

3: 人間の情報処理の理解とその応用に関する研究

4: 情報セキュリティに関する総合的な研究

5: 最先端の情報通信システムを活用した新しい研究手法

6: 情報化と社会制度の構築に関する研究



研究会の様子

これらの各テーマそれぞれに、大学等の研究者を中心とする10から30の研究班が参加しており、全体で約90の研究班がこの研究領域に取り組んでいます。国立情報学研究所からも、9つの研究班が参加しています。

6月19日~6月20日には、領域全体での研究会が開催されました。この研究会には、各班の代表者および分担者、総勢約100名が参加しました。これまでの進捗状況ならびに研究成果について各班から報告が行われるとともに、今後の進め方などについて活発な議論が行われました。

この研究領域の詳細(研究班の一覧表やこれまでの報告書など)は、下記ホームページでご覧頂けます。

URL:
<http://research.nii.ac.jp/kaken-johogaku/>

(情報メディア研究系情報検索研究部門助教 片山紀生)

■ 就任にあたって



国立情報学研究所
副所長

坂内 正夫

(さかうち まさお)

今年7月から副所長に就任いたしました。末松所長をサポートし全所員・関係の方々共々本研究所の発展に尽力致したいと念じております。どうぞ宜しくお願い致します。

さて、私はこの3月まで東大生産研所長を2期4年つとめ、現下の大学法人化の波の中で研究所がおかれている環境の厳しさは肝に銘じております。しかし、そこで本質的に求められている事は「さあ、大変だ」という後向きな対応ではなく、研究所が他所では出来ない活動、価値創造を行い、社会に自らアピールしていく「明るく、ポジティブな」対応だと信じております。

また、本研究所のターゲットたる情報通信(IT)分野についても2年ほど前までのブームから今や「ITバブル崩壊、不況の元凶」という評価の乱高下があります。しかし、これも表面的、即効的IT開発から、「人と社会に真に価値在るものを創造、提供する」IT研究・開発が今こそ必須であること、の裏返しであると大いに前向きに理解する事が出来ます。

情報学の学術研究の中核的存在たるべき本研究所は、これらの2つの厳しいけれど前向きな使命を二重に担っていると、改めて責任の重さを感じております。どうぞ皆様の暖かい御理解と御支援を賜りたいと念じております。

■ 大学院教育について

本研究所の公式ホームページでも案内しておりますように、本年4月に情報学専攻(博士後期課程)が、総合研究大学院大学数物科学研究科の新しい専攻として、14名の新生(内外国人留学生1名)でスタートしました。また、10月には国際大学院コースが開始されますが、この第1期生としては既に8名が合格(内国費留学生2名と私費留学生6名)しています。したがって、第1期生は合計22名であり、先ずはきわめて順調なスタートを切ることができたといえましょう。特に、国際大学院コースの留学生中4名はNII奨学生ですが、これはIT企業のご協力によって、アジア諸国等から極めて優秀な留学生を獲得するために創設された自前の奨学金制度でございます。国際大学院コースは制度上英語による教育指導を行うことになっておりますが、通常コースの学生と一緒に教育指導を行いますので、今秋からの大部分の講義やゼミが英語によって行われることとなります。これは情報学専攻の重要な特徴の一つになるものと思われま。さて、本専攻は4つの教育・研究指導分野(情報基盤科学、ソフトウェア科学、知能システム科学、情報環境科学)か

ら構成されており、情報科学・工学から人文社会情報学までをカバーしておりますが、更に本研究所の、学術情報サービス事業を併せ持つ先端情報学研究所としてユニークな環境によって、広い視野を持つ実践的な情報学研究者と高度IT専門家の養成を目指しております。

(知能システム研究系人間機械協調研究部門教授
上野晴樹)



Comparative Genomicsの手法による、DNA配列データからの生物情報の抽出



学術研究情報研究系
生物系研究情報研究部門 教授

藤山 秋佐夫

(ふじやま あさお)

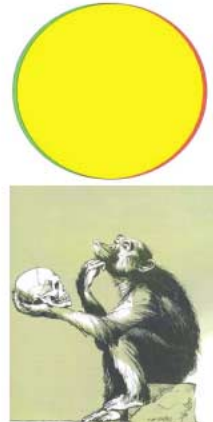
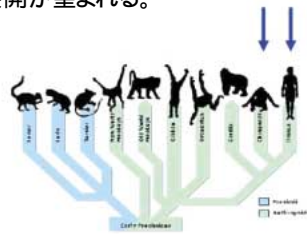
1978年名古屋大学大学院理学研究科 博士課程単位修得退学。理学博士。1980年大阪大学医学部分子遺伝学研究施設教務員、大阪大学細胞工学センター遺伝子構造・機能調節部門助手。1987年国立遺伝学研究所総合遺伝研究系助教授、総合研究大学院大学生命科学研究科助教授(併任)、理化学研究所ゲノム科学総合研究センター・チーム長(兼業)などを経て、2002年1月より現職。専門は、分子生物学、実験・情報ゲノム科学。

助教授(併任) 理化学研究所ゲノム科学総合研究センター・チーム長(兼業)などを経て、2002年1月より現職。専門は、分子生物学、実験・情報ゲノム科学。

2003年に予定されているヒト全ゲノムの解読の成果により、ヒトを構成する遺伝情報の全体像が明らかになる。しかし、いったいヒトが何個の遺伝子を使っているかという基本的な問いに対してすら、当面は推測の域を出ない回答しか得られない。ゲノム構造決定の圧倒的なスピードに、実験的証明が質量共に追いついていないからである。ゲノムに記録された遺伝情報の質的量的な違いや発現の時間的空間的な違いに反映され、個体や種の特異性が現れるというストーリーはできあがっているものの、それでは、現在の手法でどこまでヒトの遺伝情報を「真に」解読することができるのであろうか。これについては、最も解析の進んだヒトゲノムを例にとってみても、まだまだ道は遠いというのが正直なところであろう。ヒトの遺伝情報を理解するのに、ヒトDNAの配列解読だけで充分というほどには、我々の生

物情報に関する理解は進んでいない。そこで登場するのが、さまざまなゲノムの構造を比較、対照するという手法である。ヒトを中心に、チンパンジー、マウスなどさまざまな生物ゲノムを相互比較することにより、ゲノム間、生物種間で共通に保存されている領域や、ゲノムごとの特徴を示す領域が明らかになり、そこから生体機能に関する情報が得られるであろう。しかし、これらの大量のデータを

もとに克明な生物学的実験を行うことは現実的には難しい。そのため、この中からさまざまな分野の基礎科学や応用科学に重要と思われる情報を効率よく抽出し、画期的な新事実の発見につながるような新しい情報学研究の展開が望まれる。



情報通信ネットワークの高機能化、高信頼化に向けた取り組み



情報基盤研究系
ネットワークアーキテクチャ研究部門 助手

藤野 貴之

(ふじの たかゆき)

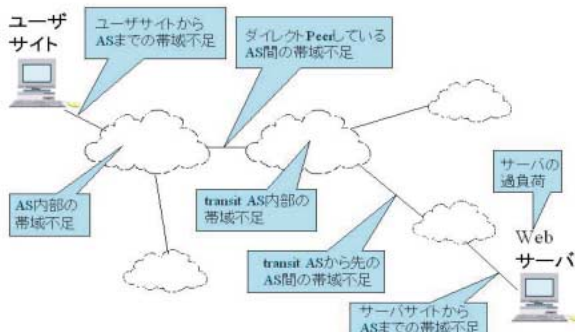
1994年 明治大学大学院工学研究科博士後期課程修了。工学博士。同年東京理科大学情報処理センター勤務。1996年 学術情報センターシステム研究系助手を経て、2000年4月より現職。超高速ネットワークアーキテクチャ、通信ネットワークの性能評価、ネットワークセキュリティなどの研究に従事。

光ネットワーク機能を利用した高信頼情報システムの構築に関する内容と、AS間接続設計の改善と高信頼化に関する内容の2つを発表した。ここでは主に後者について述べる。

ユーザが感じる「ネットワークの快適性」を阻害する要因は様々なものが挙げられる。ボトルネックとなる箇所を特定するためのパッシブな解析手法について紹介した。Route Serverを使用

して AS Path データベースを作成し、ユーザトラフィックの送信先の AS Path 分布を解析する。更に、各送信先についてアドレス解決のためのUDPパケットやTCPの再送率、ウィンドウサイズの変化などの情報を含めた総合的な解析を行うことにより、ネットワーク外へのトラフィックのボトルネックポイントを検出することが可能となる。同様に、ネットワーク外に存在する各ASについて、接続の冗長性がどの程度維持されているかを把握することにより、自AS外のネットワーク障害の影響を受けにくいAS間接続設計を行うことが可能となる。

ボトルネックの可能性



制約に基づくエージェントを用いた探索手法 (Constraint-based and Agent-centered Search)



情報学資源研究センター データコレクション研究室 客員教授
パリ第6大学コンピュータ・サイエンス教授

Philippe Codognet

(フィリップ・コドニエ)

1989年 仏・ボルドー大学コンピュータ・サイエンス博士号取得。
1990年 仏国立コンピュータ・サイエンス研究センター (INRIA) 上級研究員 (在仏ソニー・コンピュータ科学研究所にてサバティカル)。1998年 パリ第6大学コンピュータ・サイエンス教授。
/ 研究領域: 人工知能と仮想現実。特に、論理・制約をベースとする言語、組み合わせ論的最適化、並列・マルチエージェントシステム、知的仮想環境。/ 著作物: 60以上 / 論理・制約プログラミング分野の会議のプログラム委員「Constraints, an International Journal (Kluwer Academic Press)」及び「ACM Transactions on Computational Logic (ACM Press)」編

とす言語、組み合わせ論的最適化、並列・マルチエージェントシステム、知的仮想環境。/ 著作物: 60以上 / 論理・制約プログラミング分野の会議のプログラム委員「Constraints, an International Journal (Kluwer Academic Press)」及び「ACM Transactions on Computational Logic (ACM Press)」編

数十年来、人工知能の分野における主要なトピックスは、組み合わせ論的な探索問題であり、多くのアルゴリズムやフレームワークがこれまでに提案されてきた。我々の研究は制約充足問題 (CSP) に関するものである。この分野は90年代の半ばから多くの応用で大きな成功を収めており、制約プログラムのパラダイムとして結晶化している。さらに、近年においては、このような制約処理に対して、局所探索手法、メタ・ヒューリスティクス

よく見られる過剰制約問題にも適応可能である。

この研究の興味深い応用は仮想世界における人工生物のための経路計画作成である。経路計画作成が、最適化問題としてみなされ局所探索手法により解決され得るということは興味深い。我々はまた、複数の目的を持つ経路計画作成も扱えるように、1つの位置から別な位置への従来の経路計画作成を一般化した。

(原文英語)

テキスト・エンコーディング・イニシアティブ (TEI) とGENIAコーパス



Jozef Stefan 研究所インテリジェントシステム部門

Tomaz Erjavec

(トーマス・アージャヴェック)

1990年 リュブリャナ大学のコンピュータ科学修士号取得、
1992年 エディンバラ大学認知科学修士号取得、1997年リュブリャナ大学のコンピュータ科学博士号取得、スロヴェニア、リュブリャナの Jozef Stefan 研究所インテリジェントシステム部門勤務。/ スロヴェニア言語工学会長。7月7日まで、東京大学理学部情報科学科辻井研究室の招聘研究員を勤める。

テキスト・エンコーディング・イニシアティブ (TEI) は1987年に、コンピュータと人文学会 (Association for Computers and the Humanities) コンピュータ言語学会 (Association for Computational Linguistics) 文学と言語コンピューティング学会 (Association for Literary and Linguistic Computing) の提携のもと創設された国際協力活動である。TEIは、完全に一般的なテキスト・エンコーディング・モデルとそれに基づくエンコーディング規則の集合を、体系的に開発しようとした唯一の試みである。どの言語のどのタイプのテキストの処理と分析にも適しており、更に現存している (そして可能性ある) アプリケーションとその適用範囲を広げる事を目指している。

TEIの主な成果は、「電子的テキストのエンコーディングと相互交換のガイドライン」である。これはSGMLに基づくテキスト・エンコーディングに関する勧告の集大成であり、1994年の初版以来デジタル・テキストに携わる研究者の事実上の標準となった。数年前、

そのうち多くは日本からのものである。

GENIAコーパスは現在、東京大学理学部情報科学科辻井研究室で編集されている (www-tsuji.is.s.u-tokyo.ac.jp)。GENIAプロジェクトは科学者が書いたテキストから有用な情報を自動的に抽出することを目指しており、情報の過多によって生じる問題の克服を助けようとしている。プロジェクトでは、生物医学の論文から抽出した抄録の注釈付きコーパスを編集し、アプリケーション分野のテストベッドとして使えるようにしている。

コーパスに含まれる、豊かな言語学的情報と、その情報に基づく複雑な検索を考えると、標準的でモジュール形式であるデータのデジタル・エンコーディングは、第一に重要である。そのため、TEIパラメータ方式は、現在増えつつある、オンラインで入手可能な生物医学情報資源と同様、GENIAコーパスのエンコーディングに適するように開発された。

(原文英語)

■ 数値解析と応用数学に関するセミナーの開催

5月23日、24日、27日の3日間、学術総合センター12階会議室において日本応用数学会と国立情報学研究所の共催で数値解析と応用数学に関するセミナーが開催された。これは、同じ建物で5月25日に開かれた国際応用数理論義会(ICIAM Board Meeting)に出席するため来日された海外の数値解析

および応用数学の研究者を講師に迎えて行われたものである。日本の数値解析の研究者をはじめとする約30名の参加者があった。興味深い各講演に対して質疑応答も活発に行われ、有意義なセミナーであった。プログラムは下記のものであった。
(写真はDamlamian教授提供。)

5月23日(木) (1) オープニング(名古屋大学 三井 斌友 教授)

- (2) Professor Olavi Nevanlinna (Helsinki University of Technology, Finland)
Meromorphic Resolvents and Iterative Methods
- (3) Professor Ian H. Sloan (The University of New South Wales, Australia)
Numerical Integration with Many, Many Variables
- (4) Professor Alain Damlamian (University of Paris 12, France)
Multi-Scale Homogenization and Periodic Unfolding

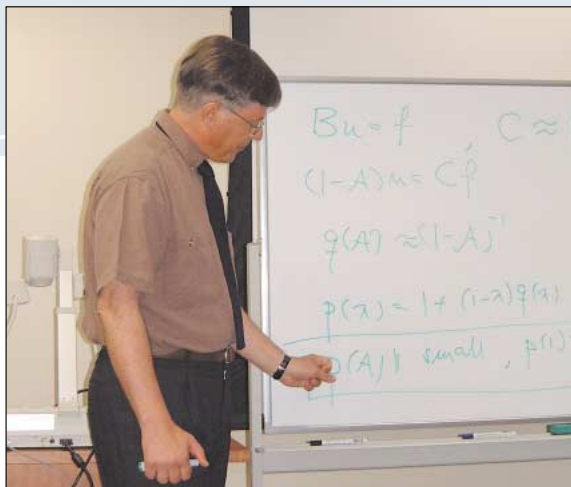
5月24日(金) (1) Professor Reinhard Mennicken (University of Regensburg, Germany)

- Spectral Theory for Systems of Differential Operators of Mixed Order and Applications
- (2) Professor Rolf Jeltsch (ETH Zuerich, Switzerland)
The Method of Transport for Systems of Hyperbolic Conservation Laws
- (3) Professor LI Tatsien (Fudan University, China)
Exact Boundary Controllability for Quasilinear Hyperbolic Systems and its Applications

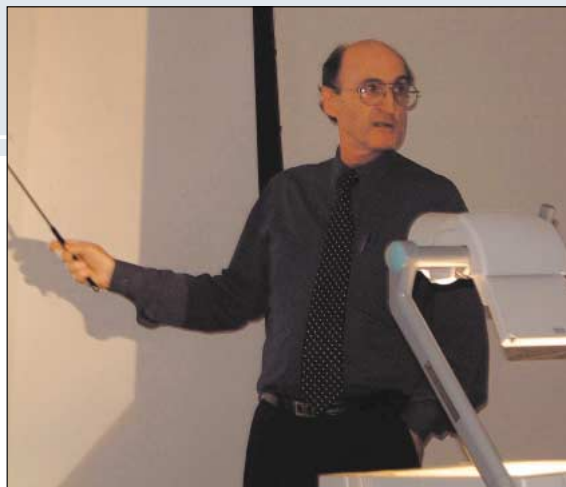
5月27日(月) (1) Professor Bob Russell (Simon Fraser University, Canada)

- Adaptive Algorithms for Solving Time-Dependent PDEs
- (2) Professor Robert O Malley (University of Washington, U.S.A.)
Shock Motion for Singularly Perturbed Partial Differential Equations
- (3) Professor Siegfried M. Rump (Technical University Hamburg-Harburg, Germany)
Structured Perturbations

(情報学基礎研究系情報数理研究部門教授 速水謙)



Professor Olavi Nevanlinna



Professor Ian H. Sloan

■ コミュニティ形成型遠隔教育プロジェクト「e-教室」

学習者と学習支援者が高等教育に関するコミュニティを形成しながら創造性豊かな学びの場を構築していくための遠隔教育システムを、国立情報学研究所の新井研究室と(株)NTTデータポケットとが共同で開発してきた。このシステムを使って、実験的な教育をインターネット上で行う「e-教室」を平成14年6月10日に開校した。「e-教室」には東京大学、京都大学をはじめ、分野を超えて複数の大学・研究機関の第一線の研究者、そして中高でユニークな教育実践を行っている教育者が参加し、300余人の中高校生とともにカリキュラムに囚われない新しい学びの場を構築しつつある。

現在、数学、図学、経済、情報の4分野を開講している。この後、法教育、ライフサイエンスなど殊に社会的要請の高い分野で、公教育では手薄な部分の教育を拡充していく予定である。写真は8月2日に行われた、図学のワークショップの様様。このようにリアルなワークショップとインターネットによるディスカ



ションを組み合わせ、より学びを深めていくプログラムを教育工学的な見地からも研究していく。

(情報学基礎研究系情報数理研究部門助教授 新井紀子)

■ 学術研究セミナー(第1回)を開催 学術研究フォーラム

平成13年11月27日に開催された「我が国の学術研究の明日を語る会～ノーベル賞連続受賞を祝して～」のメッセージの趣旨を体して、学術研究の振興に寄与する目的をもって、平成14年4月に発足した学術研究フォーラム(代表幹事=末松安晴国立情報学研究所長)主催の「学術研究セミナー(第1回)」が、去る6月12日一橋記念講堂で開催され、全国の大学、企業、団体等から約350名が参加した。

セミナーは、先ず「大学の研究と社会・経済」をテーマに有馬朗人元東京大学総長の基調講演が行われ、同氏は、大学の研究と産業界との協同における現在の問題点、反省点を指摘し双方の意識改革を促すとともに、企業と大学とがお互いに尊敬し合える関係を作ろうと述べた。

これに続き、青木利晴NTTデータ代表取締役社長、池端雪浦東京外国語大学長、黒川清東海大学医学部長、小林陽



基調講演をする有馬元東京大学総長

太郎富士ゼロックス会長及び野依良治名古屋大学物質科学国際研究センター長をパネリストに迎え、小出五郎NHK解説委員の司会によるパネルディスカッションが行われ、産学双方の第一人者による活発な討論が続いた。

基調講演はもとよりパネルによる各界からの貴重な意見に、会場の参加者は最後まで熱心に耳を傾けていた。

なお、同フォーラムは、引き続き第2回目以降の事業を展開していくこととしており、また、会員への入会も随時受け付けている(ホームページ参照)。

URL:
<http://www.nii.ac.jp/forum/index.html>

(総務課)



パネルディスカッション

■ 米国RLGとの目録システム間リンクの運用開始

平成14年6月から、NACSIS-CATを通じて、米国RLG(The Research Libraries Group, Inc.)総合目録(ユニオン・カタログ)から提供されるデータの参照利用が可能となりました。

これは、Z39.50プロトコルを利用したRLGとの接続システムの開発により実現したものです。

RLGは、研究支援を行うために1974年に設置された非営利の社団法人であり、160以上の大学図書館、国立図書館、文書館、博物館等が参加し、ユニオン・カタログの構築・提供等の図書館向けサービスを実施しています。RLGのユニオン・カ

タログは、初期刊本から現代の出版物に及びヘブライ語、アラビア語、ロシア語等を含む多様な言語資料、約1億冊を収録するものであり、規模としてはOCLCに次いで世界第2位となっています。

今回の運用開始により、RLG総合目録に含まれる図書・雑誌・楽譜等7つのデータベースを検索し、利用できるようになりました。目録作成を支援する参照MARC(MACHine Readable Catalog)としての機能が期待されます。

(コンテンツ課)

■ メタデータ・データベース構築システムの試行運用開始

ネットワーク上に存在する学術情報資源を、より組織的に収集する手段として、メタデータ(タイトル、作成者、URLなど)の活用が注目されています。

国立情報学研究所では、国内の大学・研究機関等の持つ、ネットワーク上の有用な学術情報資源を対象とした、メタデータデータベース共同構築事業を実施します。本事業は、NACSIS-CATと同様の全国大学図書館等による共同分担入力で、作成されたデータベースは、GeNii(国立情報学研究所の学術情報の総合プラットフォーム)にて公開・提供する予定です。

今秋からの事業開始に先立ち、6月から、メタデータ・データベース構築システムの試行運用を開始しました。

事業開始にあたっては、説明会の開催等で詳細をお知らせしますので、関係各機関の御理解と御協力をお願いします。

(コンテンツ課)



■ 学術情報ネットワーク(SINET)のIPv6サービス開始について

IPv6(Internet Protocol version 6)は、現行のIPv4に比べて膨大なアドレス空間を持ち、高いセキュリティ機能を備えた次世代インターネットプロトコルです。政府のe-Japan重点計画においてもIPv6の普及・推進が明言化されていること、またSINET加入機関のIPv6での接続要望が増えていることから、SINETにおいてもIPv6サービスを提供できるよう検討・準備を重ね、このたび平成14年9月2日よりサービスを開始する運びとなりました。

IPv6サービスの概要は次のとおりです。

(1) アドレスの割り当て

IPv6アドレスの申請を頂いた下記の機関等()に割り当てます。

SINET加入機関(地域ネットワークも含む)

SINET加入機関に属する研究室

複数の大学等をまたがる研究プロジェクト

(2) 接続方法及び逆引きドメインネームサーバ(DNS)の提供

サービス開始から当面は、SINET IPv4バックボーン上でIPv6パケットを通す方法での接続になります。SINETルータのIPv6対応等、諸条件が整い次第、直接IPv6での接続サービスの提供、またはIPv6 / IPv4両方での接続サービスを提供します。

また、IPv6逆引きDNSサーバを設置していますので、IPv6アドレス割り当て機関の逆引き登録をお引き受けします。

具体的な利用申請手続き方法等についてはSINETホームページでご案内しています。

URL: <http://www.sinet.ad.jp/>

(ネットワークシステム課)

■平成14年度国立情報学研究所オープンハウス(一般公開)を開催

国立情報学研究所では、研究所の研究活動、研究成果を広く社会に公開するため、7月25日(木)にオープンハウスを開催しました。

午前中は、末松所長の挨拶、坂内副所長の特別講演及び全7研究分野から1名ずつ計7名による研究紹介を行いました。12時からは、ポスター、パソコンを用いて、所内教官による研究内容の発表展示のほか、開発・事業部によるGeNii, Webcat, NACSIS-ELSなどの情報サービスの紹介等、全体で約40件の発表展示を行いました。また、午後は並行して、指導教官、大学院院生3名による大学院紹介を行いました。

当日は雨が降る悪い天気にも関わらず、所外から200名を越える参加者がありました。分かりやすい説明に努めたこともあり、参加した方からは、日頃触れることの少ない研究所の活動を知る機会として有益だった等の感想をいただきました。

(成果普及課)



オープンハウス当日の学術総合センター



坂内副所長による講演



発表展示会場

HOT NEWS

平成13年度学術情報データベース実態調査報告書の刊行

国立情報学研究所では、全国の国公立大学・短期大学・高等専門学校、大学共同利用機関、及び国立試験研究機関等に対し学術研究を目的としたデータベースを対象に「学術情報データベース実態調査」を毎年実施しており、平成13年度の調査結果をまとめた『平成13年度学術情報データベース実態調査報告書』を刊行しました。

同報告書には、調査結果の統計分析結果、作成データ

ベース一覧、及びサービスデータベース一覧を収録しています。

詳しくはホームページをご覧ください。

URL : <http://www.nii.ac.jp/survey/dbdr.html>

なお、この調査結果は、本研究所の情報検索サービス(NACSIS-IR)のデータベースディレクトリで公開しています。

URL : <http://www.nii.ac.jp/ir/ir-j.html>

(広報調査課)

■平成14年度 軽井沢土曜懇話会(6月29日・7月13日)

軽井沢の国際高等セミナーハウスにおいて、6月29日(土)および7月13日(土)に平成14年度軽井沢土曜懇話会の第2回・第3回をそれぞれ開催しました。その講演の様子を紹介します。

(成果普及課)

第2回：6月29日(土)「空に浮かぶ聖母 - 西洋美術への招待」

元国立西洋美術館館長

高階 秀爾

(たかしな しゅうじ)

高名な美術評論家であり、現在は大原美術館館長を務める高階秀爾氏の講演は豊富なスライドによる絵画の実例紹介を交えて、「空に浮かぶ聖母」をキーワードに西洋美術史の一断面を照射した大変興味深いものでした。当日配布された資料による概要は以下の通りです。

「ルネッサンス期からバロック期にかけて、理想的な美の表現として、また深い信仰の表明として描かれた数多くのマリア像を手がかりに時代背景、様式の変遷、象徴的意味、制作のエピソードなどを解説し、豊かな美の世界への案内を試みる。」



第3回：7月13日(土)「地震予測への挑戦」

東海大学教授、東京大学名誉教授

上田 誠也

(うえだ せいや)

「地震予知はできる」(岩波科学ライブラリー)等、地震のみならず地球や自然環境に関する多くの著作を執筆されている上田誠也氏の講演は、とくに地震に縁の深い我が国だけに予定の時間を超過しての大熱演となり、参加者からも熱心な質問が寄せられました。当日配布された資料による概要は以下の通りです。

「地震は世界の多くの地域で悲劇を生んできた。地震災害の軽減にはいわゆる防災対策のみならず、地震予知も大切である。もし、大地震の発生が数週間、数日程度の事前に予告されたら人命の損失は劇的に軽減されるに違いない。地震予知は地球科学最後の大きな問題の一つといってもいいだろう。最近では地震予知、特に短期予知はとても出来そうもないという風潮がみられるが、だからといって研究を放棄してはなるまい。事実、予測研究は新しい科学として着実に進歩を遂げつつあり、実際に科学的方法によって短期予測に成功した例も多い。地震予測研究の困難さ、それを乗り越えるための新手法の展開などについて考えてみたい。」



人事異動

転入(平成14年7月1日付)

坂内 正夫 教授(企画調整官)
前職:東京大学生産技術研究所
附属概念情報工学研究センター教授

客員部門(平成14年7月1日付)

山本 喜久 実証研究センターバーチャルライブラリ研究室客員教授
本務先:スタンフォード大学応用物理学科・電気学科教授
渡邊 日出海 情報学基礎研究系生命情報科学研究部門客員助教授
本務先:奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科助教授

客員部門(平成14年8月1日付)

白井 良明 知能システム研究系ロボティクス研究部門客員教授
本務先:大阪大学大学院工学研究科教授

国立情報学研究所の教官公募について

- 専門分野** 1)量子コンピューティング研究部門(情報学基礎研究系)教授、助教授
2)暗号情報研究部門(情報基盤研究系)教授、助教授
3)情報制度論研究部門(人間・社会情報研究系)教授
- 応募資格** 博士の学位を持つ(または取得見込みの)方で、年齢は助教授については40歳以下が望ましい。
- 着任時期** 採用決定後のなるべく早い時期
- 提出書類** 履歴書(所定の様式)、研究業績書等(所定の様式)、主な論文の別刷(3編)、推薦書、就任後の抱負など
- 応募締切** 平成14年10月11日(金)
- 送付先** 〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号
国立情報学研究所長 末松安晴
(応募書類は原則として返却致しません)
- 照会先** 〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号
国立情報学研究所 研究総主幹 小野 欽司
電話 03-4212-2502
E-mail kobo@nii.ac.jp
- その他** 国立情報学研究所は情報学に関する研究を総合的に行っている文部科学省の大学共同利用機関です。
本件に関する事項の詳細についてはNIIホームページに掲載されています。
URL : <http://www.nii.ac.jp/brief/koubo/koubo.html>

お知らせ

平成14年度軽井沢土曜懇話会

国際高等セミナーハウス(長野県軽井沢町)を会場に開催します。

平成14年 9月 7日(土) 小林 陽太郎 氏(富士ゼロックス(株)代表取締役会長)

平成14年 9月28日(土) 大津 純子 氏(ヴァイオリニスト)、岡田 知子 氏(ピアニスト)

平成14年10月26日(土) 佐藤 禎一 氏(日本学術振興会理事長、元文部事務次官)

平成15年 3月15日(土) 辻井 重男 氏(中央大学教授、東京工業大学名誉教授)

参加申込など詳細は成果普及課ホームページ URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/> でご案内しています。

第3回NTCIRワークショップ成果報告会

日本語・中国語・韓国語・英語を対象とした言語横断検索、特許検索、質問応答、テキスト自動要約、Web検索など情報アクセスに関わるテキスト処理技術の評価ワークショップを開催します。10カ国から約60研究グループの研究成果の報告を予定しています。使用言語は英語です。

平成14年10月8日(火)~10日(木) 学術総合センター 一橋記念講堂ほか(東京都千代田区一ツ橋)

詳細についてはホームページURL <http://research.nii.ac.jp/ntcir/workshop/work-ja.html> でお知らせします。

【問い合わせ】NTCIRプログラム委員会 E-mail:ntcadm@nii.ac.jp

神門典子 人間・社会情報研究系助教授 E-mail:kando@nii.ac.jp

平成14年度国立情報学研究所公開講演会

今年度は財団法人国際高等研究所との共催で、「高度情報化社会の未来学 - 市民・大学・社会のあり方、変わり方」をテーマに開催します。

東京会場：平成14年10月28日(月) 学術総合センター一橋記念講堂(東京都千代田区一ツ橋)

大阪会場：平成14年11月26日(火) 大阪国際会議場(大阪府大阪市北区中之島)

参加は無料です。

プログラム、申込み方法等の詳細についてはホームページURL <http://www.nii.ac.jp/hrd/> でお知らせします。

第5回日本バーチャルリアリティ学会サイバースペースと仮想都市シンポジウム

平成14年12月2日(月) 学術総合センター 中会議場(東京都千代田区一ツ橋)

詳細についてはホームページURL <http://welcome.to/sigcs/> でお知らせします。

【問い合わせ】井上智雄 知能システム研究系助手 E-mail:inoue@nii.ac.jp

NII定例研究会

国立情報学研究所では、情報学研究に関心のある研究者・技術者の交流の場として、「NII定例研究会」を企画・運営しています。「NII定例研究会」は、月に1回定期的に開催しており、研究所内外の研究者による研究発表等を行っています。開かれた研究機関として外部にも公開しており、幅広い方々の参加を歓迎しています。

今後の開催予定は次のとおりです。

第21回：平成14年 9月18日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

第22回：平成14年 10月16日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

第23回：平成14年 11月20日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

第24回：平成14年 12月18日(水) 15:00~17:00 学術総合センター12階 会議室

プログラムの詳細はホームページURL <http://research.nii.ac.jp/teirei/> でお知らせします。参加は無料です。

【問い合わせ】NII定例研究会 企画グループ

情報学研究に関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしています。

国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。

<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

